

念願に生きて永劫の彼方へ

三つの問い

「私は一体どうしたらいいのだろうか。」

「私は一体どうなるのだろうか。」

「私は一体この通りを続けていていいのだろうか。」

夜は明けた。新年は来た。

仏前礼拝もいと丁重に済ませた。めでたくお雑煮も頂戴した。

「皆様おめでとう。」

年始客の羽織袴姿も玄関先に見える。何だか心の内も清々しい。

心の中に問うてみる。

「私は一体どうしたらいいのだろうか。」

「私は一体どうなるのだろうか。」

「私は一体この通りを続けていたらいいのだろうか。」

深く深く考えて見る。

私は敬愛する私の同胞たちに、この簡単な、わかりきった問題を捧げて、共に考察を進めて行く。

頭の内

「私は一体どうしたらいいのだろうか。」

「私は一体どうなるのだろうか。」

「私は一体この通りを続けていたらいいのだろうか。」

私はあなたにお問います。昨夜即ち昨年の終りに、このわかりきった問題が未解決のまま、あなたの頭の内に残ってはいなかったか。そうして年頭、一念発起の光明に充ちた元旦、今朝まで頭の奥にこの問題がこびりついてはいないか。

明日にでもこの問題が頭の内

人としての価値

「私は一体どうしたらいいのだろうか。」

この問題が解決されてない以上、人間は一個の魂の亡んだ亡者であります。働いて

いる亡者であります。生活に光がなく、顔は灰色に曇り、眼には輝きがなく、絶望の吐息ばかり出るあなたの口から、念仏称名は出ているでしょう。けれどもいと悲しげに、亡者の厭世のうめきとしか聞えないのは何故だろうか。

「私は一体どうしたらいいのだろうか。」

この問題の答を求める前に、もっと考えて見なくてはならないことがある。

一、人としての価値は何処から生れるか。

人は生きています。生きているということがただ呼吸しているということであるならば、植物だつてしています。生きているということが食っているということであるならば、動物である以上、犬でも猫でも食っています。

人は生きています。そうしてその生きているということに価値を求めねばおかぬ人間生活には、呼吸しているということ、食っているということ以上に、そこに何かの根本的意義を見出さねばなりません。

人間としての価値は何処から生れるか。先ずそれには常識的に、世の中の役にたっているから、と答えておいて、もつと考えを進めて見る。

若い男が大儀そうな顔をして弁当をもつて電車に飛び乗ります。彼は朝寝しました。急いで家中の者にあたりちらして、やつと出勤時間に間にあうほどの時間を持つて家を出ました。彼は昨夜の酒の味を思います。それにあてられて今日の頭の痛さに眉をしかめています。それでも彼はもう十年一日の如く工場に通いました。彼は十年間に沢山な仕事をしました。そしてその作ったものが世の中に使われている以上、彼は世の中の役に立っています。けれども彼は一向世の中の尊敬も受けていないし、人格を尊ばれたこともない。彼は働いた。役に立った。この男ばかりでない。無事で働いている以上、誰だつて役に立っている。

ここに於いて、この問題をどう解決する。

2

彼の青年に私は尋問の矢を発して見る。

「君は十年一日の如く工場に通つて、沢山な器具機械を造りました。君は一体どういう心で十年一日の如く工場に通いましたか。」

「え、あまり考えたこともありませんので、ちよつと、その、即答が出来かねますが。」

「ではお問いますが、何の目的もないのにお続けになりましたか。」

「というわけでもありませんが。」

「それなら……………」

「まあ、つまり金がいりますので。その……………」

「金がいりますので、それで。」

「言わずと知れた、それで一家が生きて行きます。」

「生きて行くとは食うことにとつていいのでございませうか。」

「まあ食うからこそ生きてるので、働くのも食うためであります。」

「そうすると君は食えたら働かない人でありますね。」

「誰も金をためて働かず食うことを考えますので……………」

もうこの男には何を問わなくても結構。生きているとは食うことで、食べさせたら働きたくない。せめて働いても、それは贅沢に食うことでしかない。

贅沢に食えたら働かない。

その十年一日の如き努力も、毎日の勉強も、それがこの源から出ているのだ。たいぎそうなのも無理はない。輝きのないのも無理はない。その一行貫徹が人格を磨く砥石にならなかつたのも無理はない。

十年一日の如く 駅の側の小屋で客を待つ人力車夫。

十年一日の如く 田を耕しているお百姓。

十年一日の如く 学校に通っている先生。

十年一日の如く 兵隊を鍛えている将校。

十年一日の如く しゃべっている説教家。

十年一日の如く ……曰く何、曰く何。

その根底が先の青年と同じである以上、ひどいになると、今晚もお約束の酒飲み友達と一緒に酒を飲むために、お隣の爺さんが蔵を建てたのがにくいたために、働いているのであるならば、そこに何の価値が生れて来るだろうか。

私はクルッと向きをかえて、再び答を求める。そしてあなたのお答えを待つ。

「有り難くはないか。」

「一日生きたことが嬉しくはないか。」

「とにかく、何でもあなたに、今日一日すれば出来る仕事がある、身のまわりにいくらでもある。いくらでも見出される。それが有り難くはないか。」

「死んで閻魔大王の浄玻璃の鏡までのぞきこまなくても、このままで一大浄玻璃の鏡に照されていて、善い者は必ず楽える。極悪人でも必ず救われる。それほど因果正しい世の中で、私が今、全く自由に生きていることが嬉しくはないか。」

「生れがたき人間界に生れて、馬でもない。牛でもない。人間として生きていることが有り難くはないか。」

更に声高く、権威をもって

不退、必定の菩薩の誕生！

不退、必定の菩薩の産声！

十方諸仏は声をそろえて、

十方衆生救済の大使命に立ちきつた

法蔵菩薩の讚美のオーケストラに参加する。

罪の塊、煩惱の卵、

それが生れ出る時こそ

長い陣痛はあつたけれど

今は聞える！ 南無阿弥陀仏！

煩惱即菩提。生死即涅槃。

永劫の彼方に生き行く光樂の姿！

一念帰命 多念相続、  
念々、称々、極楽浄土を莊嚴して  
生きゆく、永劫の彼方に  
紫雲たなびき、天華が降る。

み仏の心は、春の水の如し。  
我々の心は、冬の夜の氷よ。  
とけし水は、菩提の河となり。  
清き園の、慈悲の池にそそぐ。

とけては我も亦、み仏の心よ。  
迷える罪の子を、いざやよびさまさん。  
とけし水は、菩提の河となり。  
清き園の、慈悲の池にそそぐ。

立て！ 念仏の子。  
働け！ 必定の菩薩。

この行者に向つて西方岸上に声あり。  
「我よく汝を護らん。」

私はここまで書いて、思わず合掌する。  
人としての価値はどこから生れるか。  
知る者は知れ。聞く者は聞け。

二、我とは何ぞや。

自分を考えてみる者は尊い。更に自分を知る者は尊い。  
だからぼんやり暮していた者が、それに満足することが出来ないで、

「私は一体どうしたらいいのだろう。」と、  
この大疑問を自己の内に見出して、解決しようとする人は尊い入である。  
「私は一体どうしたらいいのだろう。」

そこに目覚めの第一歩があり、向上の曙光が見え、救済の広野が開けて来る。

我とは何ぞや。

神なるか。仏なるか。

聖者なるか。凡人なるか。

善人なるか。悪人なるか。

智者なるか。愚者なるか。

親鸞に問う。

親鸞様は泣きつつ答えたもう。

「神にあらず、仏にあらず。  
聖者でもない、賢者でもない。  
善人でもない、智者でもない。  
極重悪人、愚禿親鸞である。」

親鸞に賛成も出来ぬ。丸呑みも出来ぬ。  
再び私の魂に問うて見る。

「神にもあらず、仏にもあらず。悪を悪とも知らず、無智を無智とも知らず、愚を愚とも知らぬ泥凡夫である。」

けれども目覚めた魂はそれにとどまることは出来ない。

おおうにおおわれぬ魂の内に微かに芽ばえた求めは何か。

「この暗黒に光はないか。

死ぬるこの身に死なぬ方法はないか。

この断ちがたき煩惱を始末する方法はないか。

更にこの私に徹底的断案を下す力はないか。」

釈尊にこの大問題を持つてぶつかれば、釈尊のたまわく。

「人間から仏へまで向上せよ。

汝等極重悪人のために弥陀の誓願不思議を説く。

弥陀の本願力に乗托して、救いに入れよ。そこに一切の解決がある。」

「私は一体どうしたらいいのだろうか。」

その声に従って、自分を見よ。

そこに救いを求めているのだ。光を求めているのだ。

問題の解決は自分が根本である。

だから自分の真実に徹底せよ。

そこに人間から仏への道が開かれる。

感謝の生活がそこに生れる。掃除ひとつすること、人と共に生きること、恵まれた自分に泣いて世間の見方の変わる日が来る。み仏は極重悪人を救いたもう。

感謝の人となつて念願を見出せ

賀茂郡白市、養園寺の本堂、僧院のなつかしい空気にひたつて、かねて数年間慕い合つた当寺の新発意、藤原三千丸様と本尊のみ前に読経、合掌、念仏すれば、自ら涙流れる。(二月二日朝)

「私は一体どうしたらいいのだろうか。」

私は今もこの問題に泣く真剣な我が同胞を思う。この問題を解決せんとする前に、私は三つの問題を出した。かくて知れて来た自分自身全体を提<sup>ひっさ</sup>げて、み仏の子たることに目覚めよ。そうして救いませみ仏の慈悲の御涙に洗われるのだ。

生きている者は誰でも働く。目的を以て働く時、何かが出来る。働くということ、その働くということの気持ちを変えよ。

強いられた労働から感謝の労働に、雑多な不統一な働きを統一ある働きに、酬報のための労働を報謝の生活に。更に、尊き念願の子となれ。

思う念力、巖をも徹す。

様々な身の上に、尊き念願を見出して念願に生きる力の人となれ。

「信は力なり」

信……力……念願……活動……苦……突破……向上……

豊太閤、ある時家来と共に寺に寄る。

大鐘を見た太閤は家来に向つて言う。

「この大鐘を指一本で動かす者はないか。」

あまりの大鐘、揺り動きそうにもない。誰も手を出さぬ。太閤は自ら大鐘の側によつた。俺が動かして見せる。

指一本。さらに動かぬ。

一衝、二衝、三衝、四、五、六……

鐘はわずかに動いた。

太閤はやめぬ。

段々衝いていると、そのゆれ方は段々と増して来た。ついには力に力が加わって、鐘楼もゆれるばかりに動きはじめた。

あなたの周囲に、あなたの尊き念願によらねば解決の出来ぬ問題はないか。

立てよ起てよ！ 斃れるまでやれ。

○不規律になつた家の中の空気をあなたの力ではどうすることも出来ないか。

○朝晩の礼拝が近頃やみになっているのを今朝から再び継続することは出来ないか。

○あなたの村の青年が目覚めないで暮している。大鐘に指一本の気で、それを念仏にまで引入れてやる念願は生れないか。

○毎日の金銭出納に気をつけて、五銭でも、十銭でも貯えて、それをもつと有意義なことに使いたい心は生れぬか。

○新刊の書物どころか、書物と言え、近來手にしたことがない有様でも、これから時間を作つて読書したいという気はおこらぬか。

○お説教や講演がある。是非と言つてお友達を誘つてあげる勇氣はないか。

○時間のことだつて日本全国未だに解決がつかぬ。誰か時間励行について苦心してくれる人はないか。さしむき、あなたとあなたの部落ほどでも、時間励行を叫び、実行したい念願は生れぬか。

○「光明」の読者、「光明」の同胞を増やしたい念願はないか。支部を組織する勇氣はないか。

あげて来れば限りがない。無意義な生活をやめにして、一念発起、念願の自分を見出そうではないか。

思い煩う勿れ。立ち上って唯忍！ 唯突破！

「私は一体どうなるのだろうか。」

怠ける者は貧しくなる。

偽ばかり言う者は人が信用せぬ。

学徳の優れた者は尊敬せられる。

善人は樂える。悪人は亡ぶ。

若い間、汗をおしむ者は老いて泣く。

可部町濱村久子法師の御座敷に御厄介になる。その床の軸物に本多忠疇の壁書が掲げである。曰く。

淫酒は早生の地形 勘忍は身を立つるの壁

苦勞は樂華の礎 儉約は君に仕ふるの材木

珍膳珍味わ貧の柱 多弁慮外は身を亡すの根繼

仁情が家を修むる畳 法度は僕を遣ふ家根

華麗は借金の板敷 我儘は国友に隔てらるる障子

「私は一体どうなるか。」

世間のこと全て善も恵も、自ら播いた種は自ら刈らねばならぬ。

去年も泣いた。今年も泣く。昨日も泣いた。今日も亦苦しむ。

しかもそれは皆汝自身の播く所である。

結論。たつた一つの断案。

貧しき中に立ち上れ。

悲しき涙の上に立ち上れ。

悪いことをしたこと一度気づけば、二度すまいと立ち上れ。

監獄に一度行かば、その悪いどん底に立ち上れ。

谷底に落ちた者は、そこからよじのぼれ。

時間を粗末にした者は、今日から時間を大切に使い。

奢侈に気づいて一念、質素の必要を感じた者は今日から身のまわりに大改造を行え。

念仏はかくして不退に向上する者の力である。

罪の重荷に、懺悔の杖。

高慢の頭に、悪人自覚の帽子。

忘恩の足には、知足報恩の草履。

不平の手には、心多歡喜の殊数。

不実の口には、報謝称名の歌を歌い、

聞えぬ耳には、請仏称讃の讃歌を聞き、  
空の財布に、至徳具足の餞入れて  
山賊悪魔の巣くう林を 冥衆護持の軍勢つれて  
峻しい山路は 転悪成善の一路をたづねて  
暗い闇路に 心光照護の燈  
有漏の穢身に 常行大悲の衣を着こみ  
迷いし心に 入正定聚金剛の信力  
かくして苦の人生を突破して歩む。  
これが白道に立てる者の様ではないか。胸中深く探ねても自力で造った我慢我執の堅信はないけれども、与えられたる大信心、彼方に成就せる金剛の大安心はそのま  
まに、我が信樂、大安心に立っている。

「私は一体どうなるか。」

「人事を尽くして天命を待つ」

貧して食うに困るも面白かろう。

愛別離苦、会うて別れの杯もとろう。

逆境のどん底にも笑って立とう。

人が斬るなら斬られもしよう。

唯、忍、唯忍、唯々忍。

み仏は如何なる苦悩の底にも立ち上らしめたもう。立ち上つて進む勇猛精進の姿こそ、入正定衆、必定の菩薩の姿ではないか。

受くべき悪業をほどいてほどいて進む。

そこに、超越した高潔な生活が生れる。

念仏の子には、ただ現実の努力があるばかりで、

「私は一体どうなるのだろうか。」の不安がない。

再び念願を言う。貫徹三十年。

「私は一体この通りを続けていたらいいのだろうか。」

東山天皇の貞享年間に越後の国、高田の藩士に福原勘太夫という人があつた。その人の子に市九郎という放蕩息子があつた。悪人は悪まれ嫌がられる。親からは勘当され、世人からは遠ざけられた。ある時その友人と口論の末、怒りにまかせてその友を斬り殺して何処へか姿をくらました。

彼は流れ流れて九州豊前の国、耶馬溪の近方に姿をあらわした。何と悔悟したか其処の安楽院という寺の弟子となつて、法名を禅海と言つた。

耶馬溪は奇石嶮山で名高い所、それだけ交通が不便で、特に「親知らず」の嶮の如きは、実にあぶない所で、人々は度々死傷した。

禅海は過去の罪業に泣き、仏恩の廣大にむせんだ。どうしてじつとしていられよう。

「親知らずの嶮を開いて道をつけよう。」



享保十九年、禅海四十九才、頭上漸く白髪を見んとする初老、彼はこの念願に燃えた。これより彼禅海は毎日出でて托鉢して食を乞い、入っては唯一人親知らずの嶮に開道の鑿を振った。

一日、二日、三日……………十日……………百日、  
一年三百六十五日

雨が降ろうが、風が吹こうが、  
夜中であろうが、昼であろうが、  
トツチンカン トツチンカン

巖の洞穴の中には、岩打つ音がたえない。掘りかけの巖洞こそは彼禅海の家であった。

五年、十年、二十年、三十年！

禅海のノミの音は三十年続いた。

一念々願の力は強い。掘ったトンネルの長さ三百八間、高さ二丈、幅三丈、彼の大洞門は彼の腕一本で出来た。

中津から山国川に消うて耶馬溪に至る街道、今も昔も、多くの人は彼の恩恵を受けている。

一念発起、誓願の力は強し尊し。

私は更にこの事実に伴う美しい話をつけ加えねばならぬ。彼が三十年の大工事の漸く終らんとする時であった。

かつて彼が殺した友人の一子は父の仇を討とうと探した末、禅海がここにか9  
くれているのを聞いて、名乗りをあげて父の仇を晴らさんと尋ねて来た。生れかわつた禅海は喜んで言った。

「よく探して来て下さいました。長い間この首を差し上げようと待っていました。快くこの首を差し上げます。けれども、しばしお待ち下さい。私は世人のためにこの洞門開掘の大誓願を起し、今將に了らんとしている時であります。今更卑怯の振舞はしませぬ。どうかあなたもここで私の仕事のおわるのを待つて下さい。」

その言葉には真実が見える。仇討つ子は言った。

「然らば我もこの工事を手伝つてその終りを急ぎ、その後その首をもらおう。」

二人は共に工事を急いだ。禅海の親切、どう見てもそれが父を殺した悪人に見えよう。

いよいよ工事は終わった。彼禅海は喜んで言った。

「誓願の二十年は過ぎてその目的を達した。君の助力を受けて有難い。この上はせめてもの罪亡しに我首を斬り、汝の父の霊前に回向せよ。」と願目合掌。

これを聞いた一子は、涙ながらに言った。

「私の父が悪かったのです。それとも知らずに、今日まで敵とつけねらつて来たけれど、正邪の明かになった今日、どうして尊い貴僧に刀が加えられよう。」

彼は刀に手をかけようとしめない。

禅海はその様子を見て、

「よし君がもし心がぶつて斬られないならば私は自決する。」

と刀を奪って自ら死を決せんとした。これを見た彼の一子は驚いて押し止めて、急いで刀を取りあげ、自ら髻を切つて禅海の前にひれ伏し、

「私を貴僧の弟子にして下さいませ。僧となつて長く父の菩提を弔います。」

二人の目には熱い涙が一ぱい、思わず抱き合つた二人は父子のように泣いたという。何という美談!

「私は一体このまま続けていたらいいのだろうか。」

何かしら念願のあることが人間です。

尊い念願は尊い人格から生れる。

さあさあ、前はどんな悪人だつていい。一念懺悔、南無帰命、み仏様の大慈悲に救われて、地獄一定の大否定のどん底から、尊い念願の発見を致しましょう。

腹立つ心を始末することもいい。

毎日読書することもいい。

毎日何程つつでも貯蓄して、社会のために使わせて頂くこともいい。

トンチンカン、トンチンカン、三十年の一念貫徹。

社会の大方の人たちが、あさましい現実に目も醒さないで眠っているのを見ている私たちの何という横着さでしょう。

「恵まれた隣人をゆりおこそう。」

そこに貴兄貴姉の念願を見出して下さい。

至純な念願をどんな苦しさの中にも棄てないで、倒れては立ち、苦んではふみこえ、続けて続けて永劫の彼方に歩んで行くのです。

このまま続けて、このまま続けて!

念願に生きて永劫の彼方へ。